

ゼミ 1 年間・日々の旅

柳田雅世

家に帰ったらまず、今日こんなことやったよ！と、母に報告する。まるで小学生みたいだ。違ふとすれば片手にお酒のグラスがあることぐらいか。心に波がおしよせるように興奮したゼミ、そのあとの月曜の夜はいつもより夜ふかしになって、私がというより私の口がしゃべりつづけた。

ゼミのメンバーがそれぞれ発表することのおもしろさといったら！ この 1 年間、あれほど楽しみな時間はなかった。シュヴァンクマイエルという「不正操作」。光の人マン・レイのモード写真。コレクションの定義や心理。ユイスマンスの『さかしま』の具現するデカダンス。

とくにこの小説に登場するクラプトン式機関車の美しさ、カラディウムの花の血管を思わせる形、私設のとほうもない水族館、主人公デ・ゼサントの好む色や匂いなどに、大賛成している自分を発見して、驚いてしまった。

わが家の庭には藤の木がある。屋根までとどいているので、母は藤棚をつくりたいといっていたが、ある日、私が家に帰ってきてみると、トイレの壁いちめんに藤の花がしだれていた。母がアクリル絵具で天井から壁まで藤の絵を描いたのだ。藤棚は庭にではなくトイレに実現した。以来もう 7、8 年たつが、庭の藤がまだ屋根にしがみついているのに対して、トイレの藤は一年中咲いている。居間もタイルやレンガや照明がよく変り、母の理想に近づいているようだが、ときどき熱帯のジャングルみたいになることもある。

自分の好みを実現した部屋に住むというのは、ときに窮屈で疲れたりもするけれど、特異な美意識をつらぬく誰かの部屋を覗くのはたのしい。『さかしま』の読者になれた自分を幸運だと思った。

マン・レイのモード写真がテーマのときは、すでに 5 月の軽井沢合宿で、セゾン美術館の収蔵作品を見ていたから、オブジェ性ということがよくわかった。画家のアンティエ・グメルスさんがゼミに参加された折には、マン・レイ映画『エマク・バキア』などが上映された。大学に入ってまもなくこの映画に出会ったときにはほとんどわけがわからず、ただ難しいものだと思っていたのだが、4 年ゼミではこの映画の美しさに酔っている自分に驚いた。私にとってのキーワードは「自由」となった。

ゼミで映画を見てどう感じるか、コントロールすることなどできない。好きなように、自由に、見たいように見て、だがそのあとで感動をメモして、つぎの回にはそれをもとに語りあうことも欠かせない。友人と目が合って、議論をはじめたりする。その過程もおもしろかった。『惑星ソラリス』『悪魔の発明』

『家族の肖像』『ノスタルジア』——どれもよかったが、アニメーション映画『時の支配者』をこそ生涯の5本に入りたい。

この1年間、幼少時代の素直な自分が帰ってくるようだった。大したことはいえなくてもとにかく発言するのが大切であること、外に出れば世界が驚くほどひろがっていることに気がついた。

ゼミは外にひらかれているという教授の言葉に、そのとおりだと思った。年齢差など関係なく、4・院ゼミには多くのメンバーがいて、それぞれ違うことに興味をもって研究しているのに、どの話題にも自然になじむ。友人が人形の話をする、ジゼルの話、femme fataleの話、ミロの作品と人生の話をする、そうしたすべてが、私のテーマである石の物語に通じていた。

石というテーマで卒業論文を書くのは容易ではなかった。宇宙規模の話であるし、たくさんの芸術家や文学者の語る石のなかに、私の求めるものがあるとは限らないから。私は岡山から四国への旅をした。イサム・ノグチを「あかり」のデザイナーとしてではなく、石の彫刻家、造園家、茅ヶ崎に三角形の家を設計した人、メキシコでディエゴ・リベラに拳銃をつきつけられた人として、さまざまな方向から観察することができた。

桑原弘明さんのスコープ展では、「水精の庭」の極小の洞窟、ラピス・ラズリの指との出会いがあった。スコープ作品のひとつひとつが、瀬戸内の鬼ヶ島の洞窟で感じたこと、マン・レイのモード写真で感じたこと、『さかしま』やランボーの詩で感じたことと、一直線につながった。

私は闇が好きなのかもしれない。『幻視者たち』からイサム・ノグチまで、「黒い太陽」を考えるのはこれからの課題だが、すでに気づいているのは、「光はいつも闇とともにある」という当り前のことだ。太陽が輝くときには夜の訪れを前にしており、また物質にあふれた世界では太陽が影をつくる。太陽の下で人間は、まるでクッキーの型のような自分の似姿をした影とともに動く。ダイヤモンドにだってかならず影がつきまとう。マン・レイの写真にも影が不可欠であることを思いおこした。

桑原さんのスコープも影を計算して、どこに光が入ってどのように見えるのかを美しく設定している。そもそも小さな金属箱のなかは闇だということが、この精密な作品たちの必要条件である。

ゼミ掲示板サイトの盛り上がりや、誤表現マル秘リスト以来の言葉づかい。1年間で私たちのいろんなことが変化した。このゼミにいたことで、多くのメンバーがある共通項を生涯もちつづけるだろう。アンティエさんによれば「星のマークをつけた人」はすぐわかる。これからも世界中のあちこちで、卒ゼミの星たちにも出会えるだろう。